

プログラム8「学校教育における犬童球溪」

山崎浩隆（熊本大学教授）

犬童球溪と音楽教育

犬童球溪と音楽教育との関係を見てみます。

今なお、人吉・球磨地域において《旅愁》と《故郷の廃家》の2曲は、愛唱歌として大切に歌い継がれています。大切にされてきた大きな理由の一つは、球溪がこの地の出身であることでしょう。しかし、そればかりではありません。もしそれだけが理由であれば、球溪による楽曲は他にもたくさんあり、それらも歌い継がれているはずです。この2曲が愛唱歌となっていることの大きな要因は、教育の力の大きさによるものだと考えます。

その一つは、上記2曲が教科書に掲載されていたということでしょう。この2曲は、中学校の音楽の教科書に掲載されていました。最初は、明治40年（1907年）に発行された『中等教育唱歌集』です。この歌集には先の2曲を含め、球溪が作詞したものが6曲掲載されています。戦後も中学校音楽の教科書にこの2曲が掲載されています。音楽の教科書を出版している教育出版社の教科書では《故郷の廃家》は昭和45年発行まで、《旅愁》は平成15年発行まで掲載されていました。教科書に掲載されたこの2曲は、全国の中学校で明治の末から昭和・平成までの長きにわたり、全国の中学生に歌われてきたのです。そして、人吉・球磨地域においては、この地域の先生方によって、学校を中心に今なお大切にされています。だからこそ、音楽の授業だけでなく行事や学校以外においても機会あるごとに歌われているのでしょう。

さて、人吉・球磨地域では、本県で行われている音楽祭で最も歴史の長い「犬童球溪顕彰音楽祭」が、昭和22年に始まり今年も開催されました。この音楽祭の始まりは、球溪が存命中の昭和10年に「犬童先生の顕彰音楽祭をしよう」と声を挙げた教師、教え子らが始めた音楽祭がもとになっているとのことです。球溪が他の教師とのかかわりを大切にし、音楽教育に尽力していたからこそこのことでしょう。授業研究などを通して、先生方がそのような思いをもつだけの関わりを重ね、音楽教育に注力してきたことがよくわかります。

球溪の音楽教育への熱い思いを示す一つとして、熊本市立碩台小学校に今も大切に保管されている昭和11年12月1日消印のハガキがあります。差出人は犬童信蔵（球溪）です。一面識もないことを断った上で、ラジオで聴いた碩台小の合唱に感激したこと、音楽の先生方の努力が偲ばれることなどが書かれています。このハガキからも、音楽教育を大切にしたい球溪の姿を伺うことができるのです。

教育者 犬童球溪は、残した楽曲そして音楽祭を通して、今なお音楽教育に力を与えているのです。

